

# 王羲之『十七帖』の真相への試論

遠藤 昌弘\*

A Study of "Shi qi tie" by Wang Xi-zhi

Masahiro ENDO\*

## 要約

本稿は、『十七帖』と「喪乱帖」の相違の理由を、冒頭句と末尾句の切り取りによって、ほんらい分断できるはずのないものを再構成してしまっただことよって生じたものと指摘した。また「喪乱帖」の行傾斜にあわせて「児女帖」の文字を配置して再構成することで、『十七帖』の文字をそのままにして配列しながら、現状の『十七帖』とは全く異なった印象となり文字に動勢が生まれたことを目視によって認識することを可能にした。

## 目次

- 0、前言
  - 1、王羲之『十七帖』について
  - 2、王羲之の生涯と残された書
  - 3、伏見冲敬氏の指摘と王羲之『十七帖』
  - 4、王羲之『十七帖』を肉筆として再現する
  - 5、王羲之『十七帖』に書かれた文字
  - 6、結語
  - 0、前言
- 本稿では、中国書法史上において書聖として尊重されてきた王羲之の書例のうち、とくに『十七帖』について取り扱う。王羲之の書は、

\*駒沢女子大学 非常勤講師

現在の研究成果からすると、歴代の各王朝においての絶対的と言って良いほどの重宝にもかわからず、その真跡は一字一筆も存在しない。今日伝えられている王羲之の書は、すべて摸本・臨本・拓本によって、その姿を見ることができ、真跡が存在しないことは、伝来の摸本・臨本・拓本の信頼性は不確実なままであり、真蹟また肉筆資料を駆使して近代の書学研究に画期的な業績を残し、みずからも書家として活躍した西川寧博士は、きわめて否定的な態度を示している。西川博士が王羲之の書として、一応の認知と信頼を置いているのは「喪乱帖」(宮内庁三の丸尚蔵館蔵 参考挿図1)・「孔侍中帖」(前田育徳会蔵 参考挿図2)のみである。この二件は、ともに東大寺正倉院に納められたもので、聖武天皇旧蔵品であり、中国からの将来品と考えられるものの断簡というのが研究者の一致する認識である。

「喪乱帖」「孔侍中帖」は、一見すると真跡のように見えるが、詳細な研究により摸本であることが判明している。しかしながら中国にも見ないほどの精密な摸本で、きわめて優れた摸本技術を駆使して写し取っている。このことから中国、南朝の宋・齊・梁・陳のいずれかの王室において、厳密に模写されたものと考えられている。

王羲之の楷書・行書・草書の伝来書例のうち、もっとも類例の多いのが草書の書例である。これは中国という尺牘つまり書簡の内容が、圧倒的多数である。尺牘は個人にあてられ、各地に分散したことから、幾多の戦乱などの人的災害や自然災害などをくぐりぬげ伝存したものと考えられる。

本稿では、第一章「王羲之『十七帖』について」において、書中の龍

とよばれた『十七帖』・『十七帖』の伝来の記録・『右軍書記』に記録された『十七帖』の内容・拓本になった『十七帖』をテーマに論述する。つぎに第二章「王羲之の生涯と残された書」において、王羲之の生涯・残された王羲之の書と年代・『十七帖』の書写年代点検をテーマに論述する。さらに第三章「伏見冲敬氏の指摘と王羲之『十七帖』」において、伏見冲敬氏の指摘・「喪乱帖」などにみる伏見氏の指摘・『十七帖』にある二十三種を点検する・『十七帖』と「喪乱帖」の相違をテーマに論述する。以上の内容をふまえて第四章「王羲之『十七帖』を肉筆として再現する」において、「喪乱帖」の行傾斜にあわせて「見女帖」の文字を配置して再構成する。最後に第五章「王羲之『十七帖』に書かれた文字」において、王羲之『十七帖』に書かれた文字・王羲之『十七帖』に書かれた見慣れない草書体・王羲之『十七帖』にみる草書体の源流をテーマに論述する。

王羲之『十七帖』は、王羲之の草書例の代表として研究書や解説書、また書道史年表に必ず取り上げられている名品である。しかし王羲之に最も近いとされる「喪乱帖」「孔侍中帖」と比べても、その姿はまったくと言ってよいほど異なるものである。従来この指摘について解明を試みたものはない。そこで本稿では改めて王羲之の書ならびに『十七帖』について検討し、その筆跡の持つ真相の解明を試み、あらためて王羲之『十七帖』と「喪乱帖」(本稿では、研究紀要の原稿字数規定の都合により「孔侍中帖」)については触れていない)に焦点をあてて、その関係を論じようとするものである。

本稿の初出は、筆者(遠藤)が書道研究玄筆会(埼玉県川越市新宿

町)発行の『玄筆』誌に連載した「書美探訪」第八十五回(第一九三号 2012)から第八十八回(第一九六号 2012)まで、王羲之『十七帖』と題して執筆した小論である。これに加筆・修正を加えて、新たに書き起こしたものである。

### 1、王羲之『十七帖』について

―書中の龍とよばれた『十七帖』― 歴代の書の名人のなかでも書聖として知られる王羲之(303―361)が書いた草書で、もともと有名なものは、この『十七帖』(図1・図2)であろう。『十七帖』は、その書のすばらしさから、書中の龍と賞賛されている(黄伯思『東観余論』跋所書十七帖後)。

『十七帖』はよく知られた法帖であるが、その内容は、二十九種の尺牘(書簡のこと)の文章を集めたものである。それぞれに名称がつけられていて、冒頭の第一帖は「郗司馬帖」(十七日帖「郗司帖」ともいう)といい、その文章の書き出しに十七日先書とあることから、その総称として『十七帖』と呼ばれるようになった。

―『十七帖』の伝来の記録― 『十七帖』の内容を、詳細に記録した文献に張彦遠(815頃―877頃)の『右軍書記』(王献之の書跡目録である『大令書記』とあわせて『二王書録』という)がある。

また、唐太宗の王羲之コレクションの整理分類を担当した褚遂良(596―658)にも、『右軍書目』(王羲之書目)ともいう)がある。『右軍書目』は、楷書と行書の二六七帖について、それぞれの書き出

しの一句または二句と行数を記録している。ただ草書については記事がないことから、のちに失われたものと考えられている。

この『右軍書目』にたいして『右軍書記』は、四六五帖の書跡の全文を記録していることや、『右軍書目』で見ることのできない王羲之の草書の記録があることから、唐代における伝来の王羲之書跡の内容を知るうえで貴重なものである。

褚遂良は書家として大家に挙げられる名人であるが、張彦遠も『法書要録』や『歴代名画記』を著している。これらは今日でも中国書画研究の典拠として引用される文献で、その業績はたかく評価されている。

―『右軍書記』に記録された『十七帖』の内容― 『右軍書記』の冒頭に、『十七帖』は記録されている。『右軍書記』では、『十七帖』についてだけ二十三種についての書跡の文章を引用するまえに、とくにその形状の詳細を述べている。

……十七帖長一丈二尺、即貞観中内本也。一百七行、九百四十二字。是烜赫名帖也……とあることから、卷子に装演されていたこと、貞観年間(627―649)に宮中コレクションになったことがわかる。

また、筆者である張彦遠自身が『烜赫名帖』と絶賛して、四六五帖を載せる『右軍書記』の冒頭を飾るのにふさわしい名帖であることを、じゅうぶんに意識して採録したものである。そして承知しておかなくてはならないことは、ここに載せる名品の数々は、拓本ではなく真跡か搨摸本であったはずである。搨摸本とは、今日でいう摸写本のこと

であるが、宮中において専門官によって行われたもので、真蹟と見比べても区別がつかないほど精巧に作られたものである。

―拓本になった『十七帖』― 『右軍書記』が記述する『十七帖』は二十三種を収録するのであるが、いまみる『十七帖』は、拓本として残されている。最多を載せる館本と称される法帖は二十九種があり、伝来の途中で六種が増補されたことになる。

館本は、帖の末尾に勅の行書大字が皇帝の認証として署されていることから、勅字本(図3)ともよばれる。太宗御筆と考えられている勅字の下辺には、……付直弘文館。臣解无畏勒充館本。臣褚遂良校無失……と楷書による添え書きがある。宮中学問所である弘文館において、解无畏(玄宗のころの人 712頃―756頃に活躍した)が館本(宮中蔵本)をもって刻石し、褚遂良が校閲して誤りがないことを認めた、とするものである。

しかし文に登場する解无畏と褚遂良の活躍時期が異なっていること、勅字が玄宗『鶴鶴頌』にある勅字(図4)と酷似していることをあわせると、太宗・褚遂良・玄宗・解无畏の生没時期がともに重なることがないことから、かえって押書の存在に疑問が残る。

わが国にあって有名なものは、三井記念美術館所蔵の三井本『十七帖』(図1)と京都国立博物館所蔵の上野本『十七帖』(図2)で、いずれも館本の系統の拓本冊である。

## 2、王羲之の生涯と残された書

―王羲之の生涯― 王羲之は、永嘉元年(307)魏晋南北朝時代を代表する門閥貴族である琅邪(いまの山東省膠南県)の王氏の家に生まれた。東晋建国の元勳であった同族の王導や王敦から、一族の將來を嘱望される若者のひとりであった。東晋の皇帝の元帝につかえ軍人として功勞のあった郗鑒の女婿となり、また征西將軍の庾亮の幕僚に就任し、その人物と識見を称えられた。友人であった揚州刺史の殷浩による懇願により護軍將軍に就任するものの、ほどなくして地方転出を願いでて、永和七年(351)右軍將軍を兼任して会稽内史(会稽郡の長官、いまの浙江省紹興市)となった。

永和十年(354)王羲之と不仲であった王述が、会稽内史を配下とする揚州刺史に就任する。王述は会稽郡にさまざまな圧力をかけてきたことから、翌年、病氣を理由に辞職する。会稽に移り住んでからの王羲之は、政治をはなれていた謝安・孫綽・許詢などの名士たちと蘭亭での雅会を催し、また会稽の風光明媚な山水を巡り親しんだ。道教一派である五斗米道を信奉して、無為自然を旨とした生活をおくり、興寧三年(365)五十九歳で亡くなった。

なお、王羲之の生没には異説があり、はっきりしたことは判っていない。ここでは魯一同(清の人)の説に従った。以下の文章も、これに従って述べている。

―残された王羲之の書と年代― 年代の判明している王羲之の書と伝えられるものは、以下の四件である。『楽毅論』は、永和四年(348)

王羲之四十一歳のもので、書写年代のはっきりしている最初の書例である。『蘭亭序』は、永和九年（353）四十七歳。会稽に赴任して二年目にあたり、蘭亭脩禊として知られているものである。文中の……此地有崇山峻嶺茂林脩竹。又有清流激湍映帶左右……は、その景勝を詠んだものである。『黃庭經』は、永和十二年（356）五十歳。官職を辞任した翌年のもので、老子の養生訓である。老子は、王羲之が晩年に信奉した道教の中心となる思想家である。『東方朔画贊』は、永和十二年（356）五十歳。漢の武帝に仕えた東方朔とうほうしやくの画像贊である。

—『十七帖』の書写年代— 『十七帖』にある二十九種の尺牘のうち、内容から書写年代を推定できるのは、以下の三通である。宛先は、蜀（いまの四川省）に住んでいた周撫とされる。周撫は、はじめ王導や王敦の部下であったことから、王羲之とは旧知の間柄であったことが推測される。建元元年（343）益州刺史となり、亡くなる興寧三年（365）までの二十三年間を蜀に在任していた。なお興寧三年は、王羲之と同じ没年である。

『十七帖』にある「七十帖（第十一帖）」（図5）では、周撫が七十歳になることを賀し、王羲之自身がまもなく六十歳になることを述べていることから、最晩年のものであろう。周撫は、王羲之より九歳年長になる。

「積雪凝寒帖（第五帖）」（図6）では、最後に面会してから二十六年が過ぎたことを述べているので、かりに二人の没年から逆算すると、最後の面会は、王羲之三十三歳、周撫四十二歳の頃のことと考えられ

る。二人の面識は、周撫が蜀に赴任する建元元年以前でなくてはならないので、最後の面会を咸康五年（339）の頃と推定して問題はなさそうである。そうすると、やはりこれも最晩年あたりのものと考ええてよいであろう。

「兒女帖（第十九帖）」（図7）では、自分（王羲之）には子供が七男一女で、孫が十六人いることを述べている。末子である七男の王猷之が生まれたのが建元二年（344）で、王羲之が亡くなったときは二十二歳の青年であった。年代は不明であるが、王羲之晩年のものと考えられる。

この三通には具体的な年号は書かれていないが、王羲之の晩年から没年までに書かれたものと考えられる。また、『十七帖』全体をとおして書風もおおむね相違はないことから、二十九種は王羲之の晩年から没年に書かれたものとみて良さそうである。

### 3、伏見冲敬氏の指摘と王羲之『十七帖』

—伏見冲敬氏の指摘— 伏見冲敬（1917—2002）氏は、その著『書道史点描（二玄社）』の王羲之の頁において『十七帖』について言及している。その論旨のなかで、手紙をあつめたものであるにもかかわらず、当時の手紙の書式にあるべき冒頭句と末尾句が切り取られている、という指摘がある。王羲之の手紙であったならば、冒頭と末尾に「王羲之頓首」は必ずあるはずである、というものである。

—「喪乱帖」などにみる伏見氏の指摘— 王羲之の書としてもっと

も信頼のおける摸書とされる「喪乱帖」(図8 宮内庁三の丸尚蔵館蔵)を見てみよう。たしかに冒頭は「義之頓首」ではじまり、末尾は「義之頓首頓首」となっている。また「初月帖」(遼寧省博物館蔵)も冒頭に「初月十二日。山陰義之報」とあり、末尾も「義之報」となっている。ほかに「何如帖」(「宝晋齋帖」所収)も冒頭に「義之白」とあり、末尾も「義之白」となっている。このように、冒頭句と末尾句は一致しているのが、当時の書式であったことがわかる。

— 『十七帖』にある二十三種を点検する— 伏見氏の指摘を『十七帖』にある二十三種のすべてに調べてみると、さきほどの義之頓首・義之報・義之白などが一切ないことがわかる。つまり冒頭句と末尾句は切り捨てて、本文だけを写し取ったことになる。『十七帖』の文章を最初に記録した『右軍書記』も、いまみる『十七帖』の文章と同様で、冒頭句と末尾句の記録はない。『右軍書記』を著した張彦遠(815頃—877頃)は唐末に活躍した人であるが、すでにこの頃には現在の『十七帖』と同じ姿をしていたと考えてよいであろう。

— 『十七帖』と「喪乱帖」の相違— 「喪乱帖」が摸書による写しものである肉筆のような生動はみられず、また紙面の行間が一定せず、文字の配列も左右にズレるといった箇所があっても、筆の動きや紙面にみなぎる書の風韻をつよく感じられものである。これに対して『十七帖』は、一文字が独立したようになって均等に配置されて脈絡がなく、紙面が平板に感じるのは、筆者(遠藤)だけの印象ではないと思う。

この「喪乱帖」と『十七帖』の相違は、伏見氏が指摘した冒頭句と末尾句の切り取りによって、一行の文字配列や文字の大小など、ほんらい分断できるはずのないものを再構成してしまったことによって生じたものと考えられる。篆書・隸書・楷書は文字が独立しているので、一面の拓本から切り貼りしてアルバム(碑帖)に仕立てられても自然さを感じないが、行書・草書を切り貼りして、ましてや行の構成まで変えてしまうと、原本とは比べ物にならないほど別物になってしまうのである。

#### 4、王羲之『十七帖』を肉筆として再現する

— 「喪乱帖」の行傾斜にあわせて「見女帖」の文字を配置して再構成する— 「喪乱帖」の白黒を反転(図9)させ冒頭句と末尾句を残し、「喪乱帖」の行傾斜をもとに「見女帖」(図10)の文字位置を変えずに配置して復元したものが図4である。

「喪乱帖」は一行八字が多数であるので、八字分を目安に「見女帖」の文字を「喪乱帖」の文字サイズにあわせて拡大し配置した。図4の一行目下の吾有七兒などはもう少し字間や位置を調整すれば自然になるであろうが、あえて文字の調整は行わなかった。ただひとつ調整したのは、行の傾斜だけである。

図10の「見女帖」の原帖と比べて一目瞭然、図11は「喪乱帖」と比べても引けをとらないほどに紙面の文字に勢いが生まれ、図10の原帖とはまったく別物になった。

ここで注意しておきたいのは「見女帖」の原帖の書き出しがほとんど

うに「羲之頓首」であったかはわからない、まったくの筆者（遠藤）の思いつきなのであるが、こんなにも自然に再構成できたことに自分でも驚いた。まだ一例を試しただけであるので断定には到らないが、今回の再構成の作業でわかったことは、『十七帖』は原帖の行の傾斜を垂直に直しているだけで、そのまま写している可能性が出てきたことである。

## 5、王羲之『十七帖』に書かれた文字

—王羲之『十七帖』に書かれた文字— 王羲之『十七帖』を臨書していくと、この字は何だろうかというものが出てくる。どうも知らない草書体だなど、感じるものである。では、王羲之の草書は、いったいどこに由来するものなのだろうかという疑問に、解決の糸口を探って行くことにする。

—王羲之『十七帖』に書かれた見慣れない草書体— 『十七帖』の冒頭から、気になる文字を選び出してみよう。日(21) 数字は二玄社『中国法書選』14の2頁1行目のこと(以下同じ)・慰(21)・懷(32)・復(33)・等(42)・謝(42)・端(52)・闊(62)・冀(72)・愛(83)・至(91)・既(112)・慶(142)・得(151)・幸(151)・欲(152)・常(153)・段(162)・備(191)・悉(191)・益(192)・真(201)・盛(212)・異(222)・武(231)・憂(241)・慮(241)・使(251)・尋(261)・差(273)・畢(291)・副(303)・甚(322)・数(332)・修(332)・載(333)・尽(342)・顕(352)・歳(431)・乏(432)・

形(433)などがある。

日(図12)、縦画をひいて又をかくようにするやりかたは、王羲之の書でも『十七帖』だけにあるもので、ほかに例をみない。また、王羲之の草書を習ったとされる孫過庭『書譜』や、王羲之の臨書を徹底して真を乱したとされる米芾(北宋の人)、また王羲之の臨書を生涯の日課とした王鐸(明末清初の人)なども書いていないので、特殊なものである。

端(図13)は、字姿のさいこのところが変化しているが、『史晨碑』(169)などにみる隸書体によるもので、文字の構造が共通している。

冀(図14)は、字姿の書き出しの北が大きく変化している。『北海相景君銘』(143)『鮮于璜碑』(165)などにみる隸書体によるもので、北をハのようにする文字の構造が共通している。

悉(図15)、『曹全碑』(165)などにみる隸書体によるものである。字姿の書き出しを米にする文字の構造が共通している。王羲之以後の書例も、字姿の書き出しを米にする文字の構造は共通で、活字体だけが采にしている特殊なものである。

形(図16)は、草書の字姿の最終画をフのようにしているが、『十七帖』だけにあるもので、王羲之の末裔である智永の『千字文』や『書譜』なども書いていない。ただ康里巎巎(元の人)には書例があつて、見ることが出来る。元朝は外来民族であるモンゴル族が中国を支配した王朝で、中国文化は否定され中国民族にとって鬱屈した時代であつた。書は、趙孟頫が王羲之への復古を厳守して元朝一代を代表するが、

康里巎巎もそうした王羲之への復古を継承した人物で、『十七帖』もとうぜん手習いしていることと思われる。

このほか愛・慶・幸・常・真・武・憂・慮・甚(図17)などは、篆書体や隸書体などと比べてみても構造的な関係はなさそうで、どうしてこういう草書体になったのか、まったく想像がつかないものである。

—王羲之『十七帖』にみる草書体の源流— さきに挙げた四十一字すべてを調べてみたが、草書体の源流が分かったのはわずかに端・冀・悉の三字だけであった。また日・や・形は後世への継承がなく、王羲之の『十七帖』だけにみることができるとであった。残った三十六字は、そのまま後世へ継承されて草書体の典型とされた。草書体は、王羲之一人によって作られたものではないことに疑いはないであろうが、後世への継承という視点からは、おおくの草書体は王羲之にはじまり、として良いようである。

王羲之は書の名人として書美を極めた人物であった、その格調は「晋韻」と称されて最高の評価を与えられている。これにくわえて草書においては書体の完成者として出発点に立っていることも、王羲之をとらえるうえで認識しなければならない重要なことである。

## 5、結語

本稿における研究成果は、以下の二点がある。第一点は、第三章—伏見冲敬氏の指摘と王羲之『十七帖』—の結論において、『十七帖』と「喪

乱帖」の相違の理由を、冒頭句と末尾句の切り取りによって、一行の文字配列や文字の大小など、ほんらい分断できるはずのないものを再構成してしまったことよって生じたもの、と指摘したことである。従来の研究において「喪乱帖」と『十七帖』の相違を指摘し、その理由を明確にしたものはなかった。

第二点は、第一点の指摘から得た結論を王羲之の書例を挙げて敷衍したものであるが、第四章—王羲之『十七帖』を肉筆として再現する—において、「喪乱帖」の行傾斜にあわせて「見女帖」の文字を配置して再構成することで、『十七帖』の文字をそのままにして配列しながら、現状の『十七帖』とは全く異なった印象となり文字に動勢が生まれたことを目視によって認識することが可能になった点である。これも従来の研究において「喪乱帖」と『十七帖』の行傾斜を指摘するものはなく、また実際に法帖を書写の時点に復元したのは、本稿において初めて論じ復元したものである。

従来の研究が、現状の『十七帖』をそのままテキストとして無批判に尊重し、法帖は作られるという制作の過程への視点が見落とされたまま進められ、書かれた原本そのものについての検討は及ばなかった。本稿が、この点を検討できたのは、伏見冲敬氏『書道史点描』の王羲之の頁における『十七帖』についての言及を手掛かりとして、では書かれた原本はどうなっていたのかという疑問を解決しようとして試みたものである。本稿が成立したのは伏見氏の指摘によるものである、あらためて伏見氏の学恩に感謝したい。

本稿では、『十七帖』のうちの「見女帖」の一例を試みたに過ぎない。



しかし『十七帖』には全部で二十三帖があり、残された二十二帖への検討も必要であろう。数字や数行の短句短章では無理があるが、ある程度の文章量があれば、復元することが有望と思われるものが幾つかを挙げるができる。また『十七帖』以外にも伝来の草書例はあり、これも検討の範疇に加えたい。復元されたものが多くなれば、また別な角度や新しい視点から「喪乱帖」「孔侍中帖」への検討も可能なることが予想される。

見慣れた伝来の法帖であっても、新しい王羲之書法への解釈が可能であることを本稿で確認できたことは、今後の研究へのなよりの成果ともいえよう。

(平成二十五年十月二十四日稿)

— 図版資料 —

- ・『故宮歷代法書全集』 2 中華民国国立故宮博物院 1977
- ・『角川書道字典』 角川書店 1977
- ・『中国法書選』 14 二玄社 1988

— 参考文献 —

- ・『書道全集』 8 平凡社 1957
- ・『東晋 王羲之 十七帖二種』 二玄社 1959
- ・『書道全集』 4 平凡社 1960
- ・『書道藝術』 1 中央公論社 1975
- ・『書道史点描』 二玄社 1979
- ・『中国書道事典』 木耳社 1981
- ・『法書要録』 人民美術出版社 1984
- ・『原色法帖選』 6 解説 二玄社 1985
- ・『中国法書選』 ガイド 14 二玄社 1988

图1 三井本『十七帖』冒頭部分

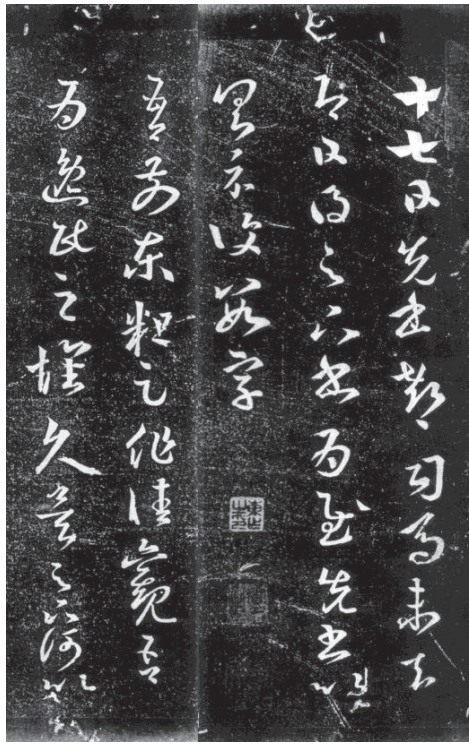


图2 上野本『十七帖』冒頭部分

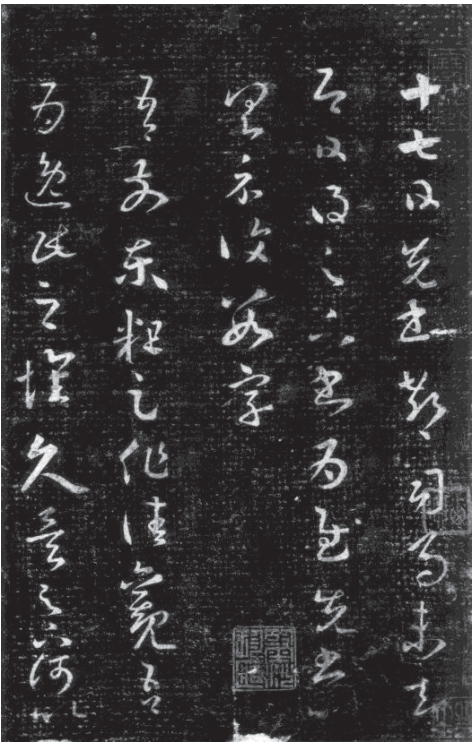


图3 三井本『十七帖』勅字部分



图4 玄宗『鶴鶴』勅字部分



図5 三井本『十七帖』のうち「七十帖」(第十一帖)

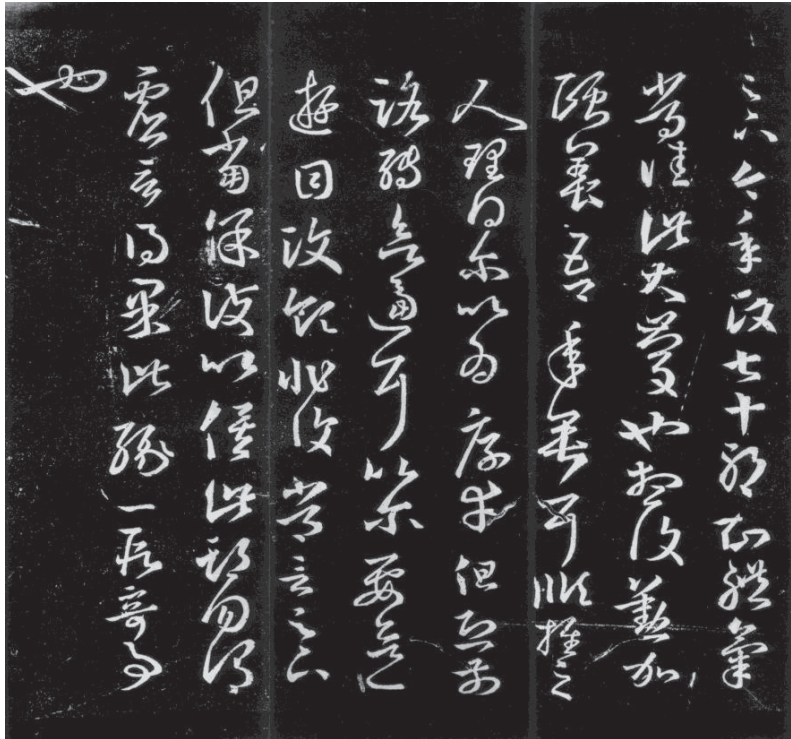


図6 同『十七帖』のうち「積雪凝寒帖」(第五帖)

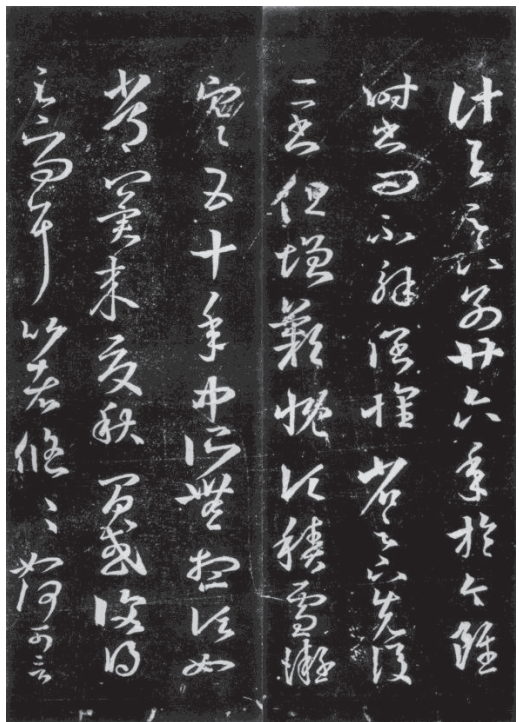


図7 同『十七帖』のうち「児女帖」(第十九帖)

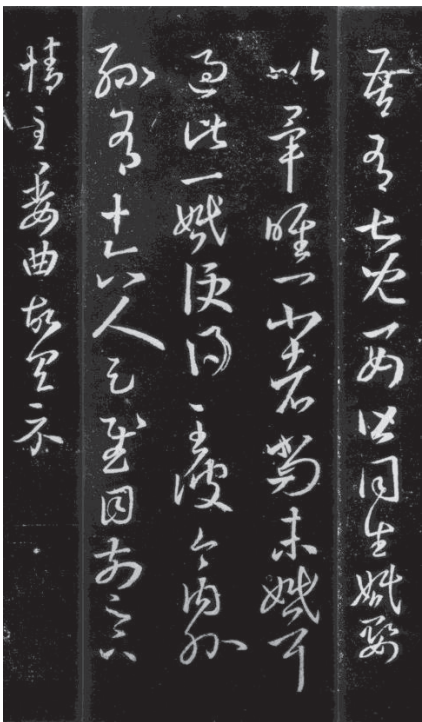


図8 『喪乱帖』冒頭部分

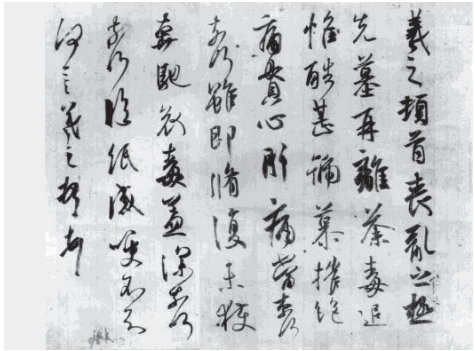


図9 『喪乱帖』白黒反転

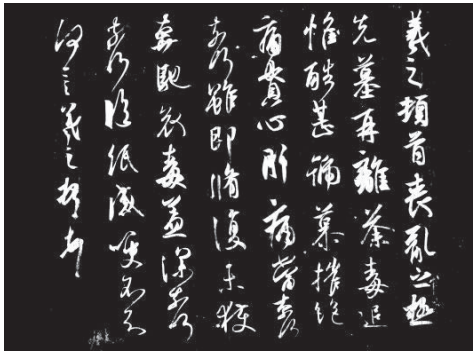


図10 三井本『十七帖』のうち「兒女帖」(第十九帖)

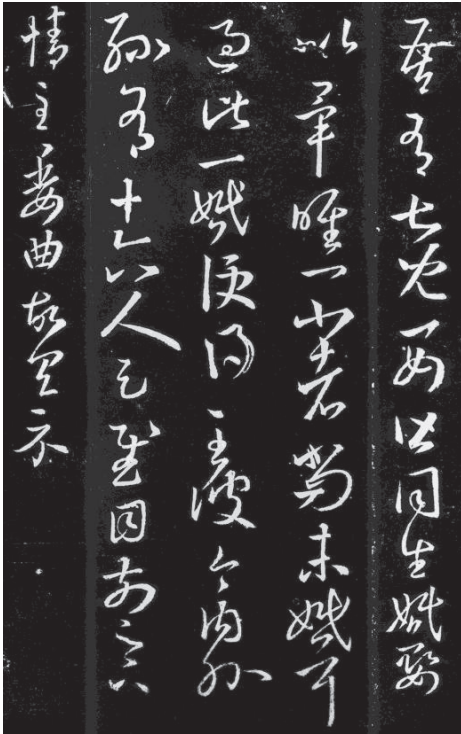


図11 『喪乱帖』の行傾斜に「兒女帖」の文字配置による再構成

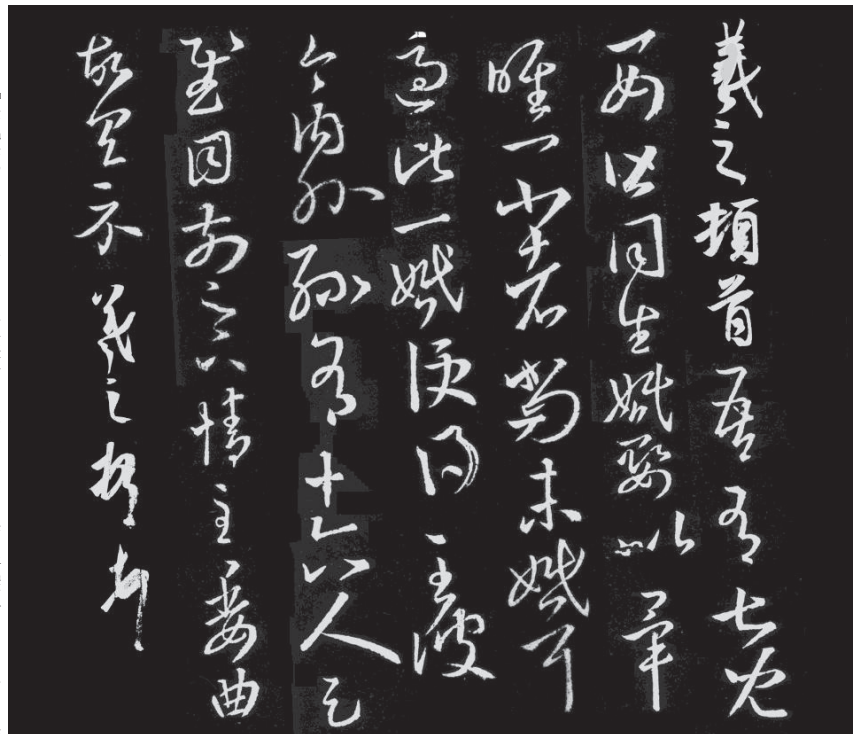


図9は、『喪乱帖』をスキャナーで複写し、パソコンの画像処理ソフトで白黒反転させたもの。図11は、図9と図10を画像処理ソフトによって合成処理したもの。



図15 悉

『曹全碑』



図14 冀

『北海相景君銘』



図13 端

『史晨碑』



図12 日

『十七帖』



『十七帖』



『鮮于璜碑』



『十七帖』



孫過庭『書譜』



活字体



『十七帖』



智永『千字文』



米芾



憂



常



愛



『十七帖』



慮



真



慶



智永『千字文』



甚



武



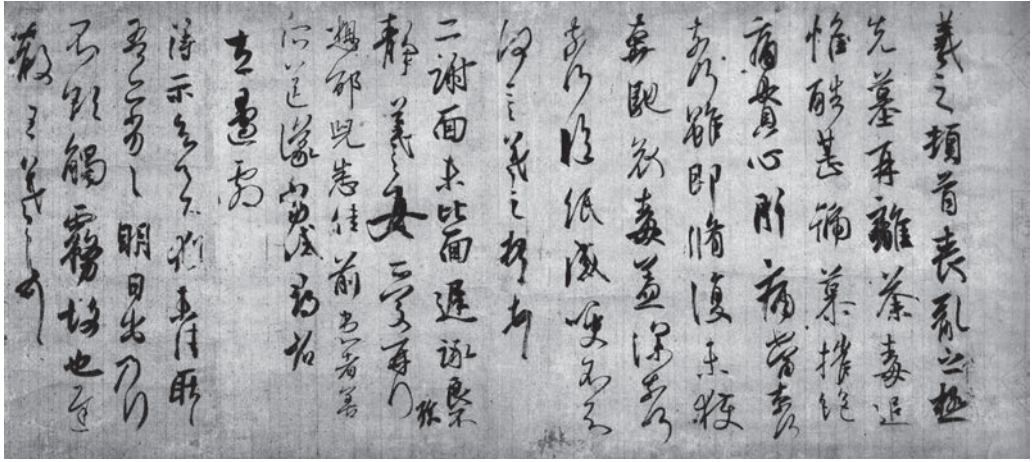
幸



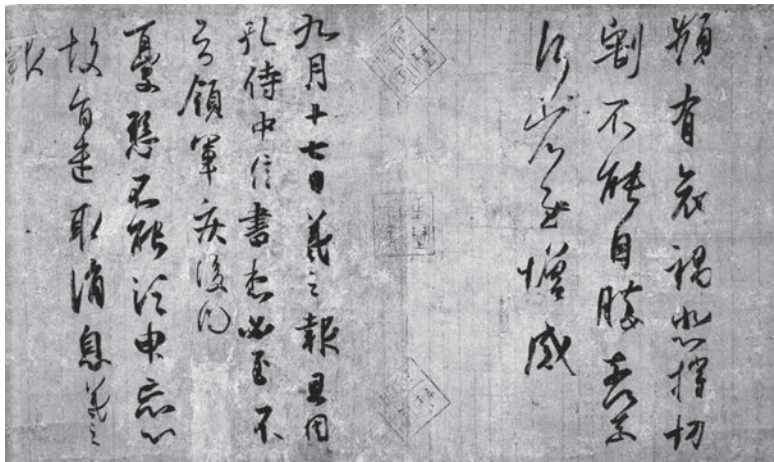
康里巎巎

図17 『十七帖』にある草書体

図16 形



参考插图 1 「喪亂帖」



参考插图 2 「孔侍中帖」